

一

次の1～5のカタカナは漢字に直し、漢字はよみを書きなさい。

- 1 安全ソウチが作動する。
- 2 総選挙のコウジを行う。
- 3 罪をサバく。
- 4 発言を自重する。
- 5 年賀状を刷る。

二

次の電話の会話で、1～5の——線部の敬語の使われ方が、正しければ「○」を、誤っていれば「×」を解答欄に記入しなさい。

「もしもし、私○○と申しますが、今そちらに校長先生はおりますか。大切な用件なので、先生に直接、申し上げたいのですが。」

「大変申し訳ありません。今ちょうど校長はいらっしゃらないので、もどきましたらすぐに、こちらから改めてお電話を差し上げますが。」

「いえ、私もこれからちよつと外出させていただきますので、また後ほどかけ直します。」

三

次の1～5の文について——線部の意味として、適当なものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- 1 あまりの光景に、あつけにとられてしまった。
 ア 気分が悪くなつて イ 深く感動して ウ 驚きあきれて エ 思わず声をだして
- 2 ピアノの演奏に関しては、彼女の右にでるものがない。
 ア 彼女を支持するものはいない イ 彼女を批評できるものはいない
 ウ 彼女より下手なものはいない エ 彼女より優れたものはいない
- 3 白熱した議論に水をさす。
 ア じゃまをする イ 落ち着かせる ウ 批判する エ 不快になる
- 4 彼は私にとって、かけがえのない友人の一人だ。
 ア つきあいが浅くない イ 苦勞のかいがない ウ 欠けてはならない エ 代わるものがない
- 5 彼は取り付く島もない態度であつた。
 ア 不親切で話すきつかけもない イ 不安定ではつきりしない
 ウ 非常識で理解ができない エ 忙しくてゆとりのない

四

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

シカは最近になつてもつとも数が増え、また分布が拡大した動物で、各地で増えすぎが問題になっています。しばらく前のことになりましたが、日光地方で林業被害がひどくなり、また自然林へも影響がおよぶようになってきたために、シカ駆除が強化されました。このとき都市住民を中心に、シカを駆除するのは残酷だとして駆除反対運動がおきました。いっぽう、以前から日光地方の植物を愛してきた人たちは、美しい花がどんどん失われて日光の自然が破壊されているから、これをくい止めるためにシカを駆除するよう強く訴えました。

①私はこの図式をはじめから予想していました。とくに、都会派によるシカ駆除反対は、1章で紹介した小笠原諸島のヤギ駆除のときに経験していましたから、かならずおきると思っていました。都会人は自然のことも農林業のことも知らず、「かわいいバンビちゃんを殺すなんてかわいそうだ」という反応をします。これは世界共通な現象で「バンビ症候群」と呼ばれています。

これにくらべれば、植物愛好派はもとも自然のことをよく知っています。しかし、その多くは美しい花を咲かせる植物が好きなのです。あたりまえのことですが、シカは目の前に植物があればかまわず食べます。きれいな花をつけるつけないは関係ありません。植物が好きなのは、シカがササやスゲといったあまりパツとしない花をつける植物だけを食べればいいのでしょうか。そういう好き嫌いで植物を分けるのはフェアな態度とはいえません。

いずれにしても、好きなものが違う人が出会えば対立するのは必定です。こうしてシカ派と植物派は対立しました。しかし、保全生態学の視点からすれば、どちらもまちがっています。なぜなら、保全にとつてたいせつなのはシカだけでも、植物だけでもなく、その両者がバランスをとつて生きる、その状態を守ることだからです。

それでは、なぜ日光地方でシカが増えすぎて、このバランスが崩れたのでしょうか。

シカは生物学的な特性から繁殖力が強い動物です。食料の十分な集団では大ざっぱに言えば、二歳以上のメスはほとんどが毎年出産します。子ジカの死亡率はかなり高く、とくに最初の冬には相当数の子ジカが死亡します。かわいそうなことです。これは多くの野生動物に共通のことです。多く生まれて多く死ぬ、それによっていわば安定した数が保たれているのです。それだけに、^②もしなんらかの理由で子ジカの死亡率が下がれば、シカ全体の数が増えることになります。

みなさんは「地球温暖化」ということは聞いたことがあると思います。二酸化炭素の増加によって地球が温室のようになって気温が上昇しているのです。日本列島も最近は暖冬がづづいています。子ジカの死亡の大きな原因は、冬に雪の中で動けなくなつて餓死することです。ですから、雪が少なくなつて子ジカの生存率が高くなれば、シカが増えるのは十分にありえることです。

農林業が衰退したために農山村の人が少なくなったことが、シカを含む野生動物の侵入を許して、その結果、農林業に被害が出るようになりました。シカの場合も同じ背景がありますが、シカの場合はさらに牧場の問題があります。北海道や岩手県でもシカが増えましたが、これらの地方では、牧場の牧草を食べることでシカの栄養状態がよくなったことが原因のひとつと思われます。

また、狩猟の力がなくなつたことがあります。^{*}ハンターの数の変化をみると、一九八〇年ごろ以降、確実に少なくなつていくことがわかります。娯楽がかぎられていた時代、いなかの若者にとつて狩猟は魅力ある娯楽でしたし、肉は高価な食べ物で、タンパク質がかぎられていた山村では肉がとれる狩猟は実用的な意味もおおいにありました。シカやクマ、イノシシといった大物猟は大きなイベントでしたが、ウサギやキジの猟は個人の小規模な楽しみとして日常的におこなわれていました。それに密猟もありました。しかしいまやハンターの数が減つただけでなく、高齢化しており、ハンターはいまではおじいさんばかりになつてしまいました。こうして狩猟圧が低くなつたことがシカの増加をうながしたはずで

す。

戦後の経済復興の時代に、森林が大規模に伐採されました。自動車の普及により林道ができ、チェーン・ソーも普及したので、農山村のまわりはもちろん、奥山までもがどんどん伐採されました。

森林伐採は大きな木がなくなることだと考えがちですが、シカの食料ということからいえば、伐採によって食料が一気に数倍に増えるという効果があるのです。いままで天井のようにおおわれていた木がなくなつて、直射日光が地面に当たるようになるので、草本や低木が旺盛に茂るようになります。数年もたてば、歩くのもむずかしいほど植物があふれるように生えることになります。このことがシカの数が増えることの地ならしをしたらと思われます。

すでにふれたように、シカは繁殖力の強い動物です。世界的にみて、シカのすむところにはオオカミやピューマなどがいて子ジカや歳とつたシカを殺して食べることが多く、これを「捕食」といいます。シカの繁殖力の強さは、この捕食に対する性質と考えられています。日本では二〇世紀のはじめにオオカミが絶滅しましたから、そのことがシカの増加にプラスにはたっている可能性はあります。

現在の日本でのシカの増えすぎは、シカにもともと強い繁殖力があり、それに暖冬が子ジカの死亡率を下げたこと、狩猟圧が低くなつたこと、捕食がなくなつたこと、^④によって食料事情がよくなり、栄養状態がよくなつたこと、農山村から人が少なくなつたり、山村の土地管理が変化したことなどが総合的にかかわっているようです。

シカの強い繁殖力は、シカそのもののもつ変わらぬ性質ですが、狩猟圧が低くなつたことや、森林伐採、農山村から人が少なくなつたことなどは、まったく人間社会の変化によるものです。オオカミの絶滅も人間による撲滅の結果です。暖冬は地球規模の自然の変化のようですが、これももともとは人間の燃料利用の結果です。そのように考えると、シカが増えすぎたことは^⑤つまりところ人間活動の結果ということになります。

かつての狩猟のいきすぎによってシカが少なくなり、これが人間のせいだということはすぐにわかります。

⑥

シカの増えすぎも人間のためだというのはなかなかわからないものです。そして増えたシカを悪者に仕立てがちです。これは正しい態度とはいえません。

このようなことを考えると、シカ問題の解決はおのずと明らかです。シカの数には人間の責任において適切に管理してやらなければならないということです。その方法には二つがあり、ひとつは狩猟によってシカの頭数を抑制すること、もうひとつは生息地の管理をすることによってシカが増えすぎないようにすることです。

シカの数や狩猟によって抑制するのは世界各地でおこなわれている方法で、もつとも直接的な方法です。欧米ではシカはもつとも代表的な狩猟であり、たんに狩といえどシカをさすほどです。日本ではすでに紹介したようにハンターは減少しています。狩猟そのものは銃砲のとりしまりの強化や、残酷な行為であるというイメージが定着し、弱体化しつつあります。シカの増加はとどまる傾向をみせておらず、あと一〇年たったとき、このままハンターが減少していけば問題は深刻になるものと思われます。

シカの増加に対して直接的な効果をもつ手段としての狩猟に期待できないということになると、そのかわりになる方法を考えなければなりません。

シカが増加した理由のひとつに、森林の伐採による食料の増加がありますが、伐採したあとにはスギやヒノキなどの針葉樹が植えられました。植林された針葉樹は一〇年ほどすると生長して低木や草本をおおうようになり、二〇年もたてば林の中はまっ暗になりますから、一時的に増えた植物が急に減ることになります。

広い範囲で同時に植林がおこなわれたとすると、シカが増えたあとに食料不足がおきるようになります。その結果、シカは食料事情のいい場所、たとえば新しい造林地や落葉樹林、道路沿いなどに集中することになります。各地のシカ問題の背景には、森林伐採による食料の増加のあとで食料が減ったという事情があるものと思われます。

土地がシカを増やす状態にあるかぎり、相当の狩猟圧をかけなければ増えすぎを抑えることはできません。確かに、狩

猟はすぐにききめのある即効薬といえるかもしれませんが、シカの集団があまり大きくなくて、ハンターがたくさんいた時代には、それによってあるていどのバランスが保たれていましたが、いまはそのバランスが崩れてしまいました。

その意味でシカが増える条件、つまりシカの食料がありすぎる土地をそのままにしている問題は問題の解決はむずかしいです。シカ管理のために生息地管理をするというのは、即効薬（狩猟）に対して、⑧にたとえられるでしょう。

日本各地の低い山では針葉樹の植林がすすんで、全国の森林面積の半分はこのような森林となっています。シカから見れば、食料の乏しい針葉樹林が広がり、食料がある森林や藪が点々とある中に生きていることとなります。そこに多すぎるシカがすんでいるために被害がおきているわけです。この望ましくない状態がそのままつづくのか、結局は食料の量に応じた頭数にまで減少して落ちつくのかはわかりません。

しかし、地形が複雑なうえに、土地所有が民有地、町有地、国有地など複雑に分かれていて、さまざまな群落がモザイク状にあることを考えると、シカはそれらを使いながら生きつづける可能性のほうが大きいように思われます。シカ対策はこのようなことを考えに入れなければなりません。

このようにシカ問題は相当大きな問題であり、土地管理と密接にかかわっていますから、⑨的な取り組みが必要で、このためには、ひとつの県を数分の一ににわたる面積で土地利用を計画し、数十年の期間を考えて森林の管理をおこなうべきです。シカが増えすぎないように伐採地は少なくし、もし伐採したら、そのあとはシカが侵入できない工夫をするという、シカがすみにくい針葉樹はあるていど少なくし、全体としてはシカが安定して暮らせる落葉樹林の割合を大きくするのが望ましいのです。こうすることによって増えすぎや減りすぎを抑える生息地管理をし、同時に一定の狩猟圧を加えて農林業被害を小さくすることも必要です。

ここでもいちばんたいせつなのはシカの地道な研究です。シカの研究がかなりくわしくおこなわれている場所はいくつかありますが、シカの生活は場所ごとにかなり違います。そのように生活様式を変えられること自体がシカの性質のよう

なのです。ですから、ある場所のシカがこうだからといって、そのまま参考にすることはできません。それぞれの土地でしっかりとデータを長い時間とらなければなりません。そして広い土地について、長い時間を考えた土地管理計画を立てることが必要です。これまでは土地管理計画をつくるとき、野生動物の問題はほとんど考えられてきませんでした。これからはこのことをぜひ組みこんでほしいと思います。

(高槻成紀「野生動物と共存できるか―保全生態学入門」)

*フエア……公平なさま

*ハンター……りやうし 猟師

*モザイク……ガラス、タイル、木などの小片を組み合わせ、模様をあらわしたもの

問一 本文には次の段落がぬけています。この段落が入る直後の段落の、初めの六字をぬき出さない。(、や。や「は一字とする。)

ただし、伐採がさかんにおこなわれたのが一九六〇年代までであるのに対して、シカが急に増えはじめたのはその後なので、時間的なずれがあります。そのため、これだけでシカの増加を説明することはできません。

問二 ①「この図式をはじめから予想していました」とありますが、筆者はシカや植物を大切に思う人たちに対し、それぞれを保つていく上で重要なのはどのようなことだと述べていますか。文中から四十五字以内でさがし、初めと終わりのそれぞれ五字をぬき出さない。(、や。や「は一字とする。)

問三 ②「もしなんらかの理由で子ジカの死亡率が下があれば」とありますが、子ジカの死亡率が下がる要因として筆者はどのようなものと推測していますか。三十字以上四十字以内で答えなさい。(、や。や「は一字とする。)

問四 ③「ばかり」と同じはたらきのものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 今にも踊りださんばかりの喜び方だ。
- イ 主人公の少女の年齢は十歳ばかりだ。
- ウ 油断したばかりに、計画は失敗した。
- エ 家に着き、母の帰りを待つばかりだ。

問五 ④に入る五字以内の言葉を、本文からぬき出して答えなさい。

- 問六 ⑤「つまるところ」の意味として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア かくしん 核心 イ 強調 ウ 結局 エ 例示

問七 ⑥に入る言葉として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア そして イ ところが ウ つまり エ むしろ

問八 ⑦「そのかわりになる方法」とはどのようなものですか。本文から六字以内でぬき出して答えなさい。

問九

⑧ に入る言葉として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 手術で悪い部分を取り除くこと
- イ 体質そのものを改善すること
- ウ 自然に治っていくのを待つこと
- エ 応急手当をして様子を見ること

問十

⑨ に入る言葉として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 総合
- イ 保守
- ウ 対照
- エ 精神

問十一

本文の内容として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日光地方におけるシカの増加は、狩猟圧が低くなったことやオオカミの絶滅などに加え、観光客がシカにエサを与えたことも原因の一つである。
- イ シカの頭数を抑制するために狩猟は大切な方法であり、今後はいかに若い世代のハンターを育成していくかが課題である。
- ウ これからの土地管理計画では、シカの頭数を減らすために食料の乏しい針葉樹林を積極的に増やすことが最も重要である。
- エ シカの増加は強い繁殖力をもつシカそのものの性質のほかに、様々な人間活動によつて起きたこととも関係している。

五

次の文章はサンタクロースにそっくりなクリス・クリングルが住んでいた老人ホームを追い出され、知人がいるセントラルパーク動物園でやっかいになろうと決めた後の場面です。文章を読んで後の問いに答えなさい。

開園まえのその時間、セントラルパーク動物園はがらんとしていた。トナカイの囲いを掃除していた飼育係のジムは、白いひげの老人がやってくるのを見て、うれしそうにシャベルを振った。

「おはようございまーす！ お元氣ですかあ？」

「元氣、元氣！ ジム、やつこさんたち、どうしてる？」

ジムは笑った。

「優雅に暮らしてますよ、まるまるふとつて。だれかさんのせいじゃないんですか？」

クリスは「あつはつはっ！」と笑い、口笛を吹いた。囲いの奥の小屋から、一頭のトナカイがおずおずと顔を出し、もう一頭、その横にならんだ。クリスがまた口笛を吹き、ニンジンを見せると、次々に五、六頭出てきて、クリスの手から食べはじめた。

ジムは、にこにこ笑いながら見ている。不思議な人だなあ。動物を手なずけることにかけては、天才だ。ほんと、うまいよ。

トナカイは警戒心の強い動物で、十年以上も世話をしているジムにさえ、それほどなついていない。ところが、臆病なメスのトナカイでも、クリスには心をゆるめているらしく、手からえさをもらって食べる。そんな場面を見るたびに、ジムは感心してしまう。① ジムとクリスが仲がいいのは、そんなわけからだっただけだ。

「ジム、実は、泊まる場所を探しているんだよ。二、三日、いさせてもらえないかい？」

「いいですよ、クリングルさん。二、三日どころか、好きなだけ泊まってください。場所はたっぷりありますから」

安心したクリスは、ちょっと散歩をしてくるよ、と言って、歩きはじめた。その足取りは、老人らしからぬ軽やかさ。行き先はとくに決めていない。十一月の、ちょっと冷たい風に吹かれて歩いてみると、なにしろ愉快でたまらないのだ。これで雪が積もっていれば申し分ないんだが、などと思いつながら歩くうちに、公園の西のはずれまで来た。と、足を止め、耳をそばだてた。公園の外でバンドが演奏している！ かすかに聞こえる浮きたつようなその曲は……おっ、《ジングルベル》！ クリスはあたりを見まわし、いちばん近い出口をめざした。

出てみると、公園の外はお祭りムードに沸きたっていた。公園の西の縁を南北に走る大通り、セントラルパーク・ウェストも、大通りから西に折れるたぐさんの横町も、華やかな色の洪水だ。そう、メイシー百貨店の大パレードがまもなく出発するのである。毎年、十一月の終わりに、メイシー百貨店が主催するこの感謝祭パレードは、子どもたちの夢の夢、人間の大人が子どもにかなえてやれる夢のうちでも、おそらく最大級のもののだろう。

とてつもなく大きな風船が、あちちでもこちちでも、寒風にあおられ、ゆらりゆらりと動いている。種類は実にさまざま。その昔、メイフラワー号でアメリカにやってきた清教徒。巨人族を退治したジャック（英国民話の主人公）。パンダ。先っぽがビルの三階まで届きそうなソフトクリーム。

パレードふうの衣裳をつけた男たちが風船のロープをしっかりつかんでいるが、風船があまりにもでかいため、みんなリリパット人のようだ。『②』に出てくる小人たちが、駆けまわったり、山車によじのぼったり。おなじみのキャラクターが、ほかにもいっぱいいる。楽隊も一ダースほど出ていて、華麗な制服を着こんだ楽士たちが、思い思いに楽器の音色をためしていた。

あそこにいる若いきれいな女性、名簿のチェックに余念のない彼女が、この一大イベントの責任者らしい。すかつとした身なりの彼女を、まわりの人たちが「ウォーカーさん」と呼んでいるのが、クリスにも聞こえた。彼女のそばの、髪の毛の薄くなったメガネの男はシエルハマー氏。シエルハマー氏は、見受けたところ、かなりあせっているようだ。

クリスは、最後の山車に目をとめた。それは橋に乗ったサンタクロースの山車で、橋を曳くのは、本物そっくりに作られた八頭の木製のトナカイである。近づいていってみると、サンタクロースはムチの振り方を練習していた。だが、どういうわけか、足がふらついているうえに、ムチの振り方もでたらめだ。見ていられなくなったクリスは、さらに近づいて声をかけた。

「すみませんが、それ、ちょっと貸してもらえませんか」

借りたムチを、クリスは軽くひと振りした。

ヒューッ！ パチッ！

長いムチの先端が、先頭のトナカイの耳の上三センチほどのところを、みごとに通過した。クリスは、山車の上のサンタクロースに教えてやった。

「よろしいですか。コツは手首のひねり方ですよ」

ところが、パレードのサンタクロースはろくすっぽ聞いてもいない。そのとき、サンタクロースの息が、クリスにかかった。酒くさい！ 山車上のサンタクロースは、膝かけの下から小瓶を取りだして、ひと口飲むと、そそくさと隠した。だが、すぐまた出して、ぐびりとやった。

③ クリスは仰天した。酔っぱらいのサンタクロース！ 大勢の子どもが見ているというのに！ さっきのウォーカーさんとやらに知らせよう！ と思ったそのとき、当のミセス・ウォーカーが、クリスのすぐ横で、山車の隊列に向かって「ちよつと前へ！」と合図をした。がくと山車が動いた。はずみでサンタクロースはよろけ、ころげ落ちそうになった。

サンタクロースが酔っていることに、ミセス・ウォーカーもすぐに気づいた。出演者に落ち度があれば、彼女が責任を取るはめになる。ミセス・ウォーカーはその場で彼をクビにした。

「メイシー社長に見られていたら！」

シエルハマー氏が、ぞっとした顔で言った。

「それより、ギンベル百貨店の社長に見られなくて、助かったわ！」

だが、パレードの出発直前に、サンタクロースがいなくなったのだ。と、そのとき、ミセス・ウォーカーとシエルハマー氏は、同時にクリスに目をとめ、^④天から降ってきたようなこのチャンスに飛びついた。

ミセス・ウォーカーがクリスにきいた。

「あとう、サンタクロースになっていただけませんか？」

横から、シエルハマー氏もきいた。

「ご経験は、おありで？」

クリスは、吹きだしそうになったが、すまして答えた。

「はあ、すこしなら」

「それでしたら、力を貸してくださいな。お願いします！」

クリスは、しゃんと背中をのびした。

「マダム、まがいのサンタクロースの代役なんぞ、^⑤引き受けられませんな」

ミセス・ウォーカーは、さらに頼んだ。

「お礼は、^⑥充分にさせていただきますわ」

しかし、クリスはうんと言わない。シエルハマー氏が、先にあきらめた。

「これ以上、ぐずぐずするわけには……。サンタクロースなしで出発しましょう」

クリスは通りの両側を眺めた。沿道に、目を輝かせた子どもたちがあふれている。パレードが始まるのを待ちかねてい

るのだ。そうか、サンタクロースがいなかったら、この子たちがっかりするね！

クリスは、帽子とステッキをシエルハマー氏に渡した。

「よろしい、衣裳をください。やりましょう！」

公園ぞいの長い通りを、いよいよパレードが動き出した。花形は、もちろんサンタクロース！ 櫓に乗ったクリスは、ムチの音も高らかに、何千人もの子どもたちの歓声に包まれ、にこやかに進んでいった。

翌朝、スーツでぴしっときめたドリス・ウォーカーが出勤してみると、クリスが待っていた。ドリスは、メイシー百貨店の人事部長。昨日、おもちゃ売り場主任、シエルハマー氏から「クリスを店のサンタクロースに雇っては」との進言を受けていた。

クリスのサンタクロースは、パレードで大いに人気を博し、おかげで、パレードの後のイベントも大成功をおさめた。クリスは、これまでメイシー百貨店が雇った人の中で、サンタクロースらしさにかけては、まさにピカ一。シエルハマー氏は、^⑦そこにすっかり惚れこみ、おもちゃ売り場のサンタクロースになってもらえば、クリスマスにむかって売り上げがぐんと伸びるはず、と考えたのである。

あらためてドリスが「引きうけてくださる？」とたずねたところ、クリスは「喜んでやります」と答えた。ドリスはその場で雇うことに決め、内心、ほっとした。よかった、去年まではサンタクロースの人選に苦労したけれど、今年ははやばやと頭痛の種がひとつ減ったわ……！

給料などの雇用条件をドリスがこまごまと説明するのを、クリスは気のない顔で聞いていた。ドリスは、呼び鈴を押し、アシスタントのミス・アダムズを呼んだ。

ミス・アダムズの部屋で、雇用カードを渡されたクリスは、スペンサー体と呼ばれるまるみをおびた書体で、ひとつづ

つ、きちんと書きこんでいった。

氏名 クリス・クリングル

住所 ロングアイランド、グレートネック、メイプルウッド老人ホーム

年齢 口とおないどし、齒よりやや上

ミス・アダムズは、クリスの返したカードをちらつと見て、「はい、どうも。シエルハマーさんが向こうで待ってますから」と言うと、部長室に戻っていった。

シエルハマー氏は、クリスをロッカールームに連れていくと、サンタクロースの衣裳を渡し、売り場に出ているおもちゃのリストも渡して、いろいろと説明した。

「しるしをつけてあるのが、今年の重点商品なんだ」

クリスは、うなずきながら聞いていたが、ときどきはさむ言葉から、メイシー百貨店で売っているおもちゃのことを、驚くほどよく知っているのがうかがえた。シエルハマー氏は念を押した。

「もしもだね、子どものほしがるおもちゃが品切れだったら、しるしをつけた商品をすすめるんだよ」

クリスは、⑧、うなずいた。シエルハマー氏の肚のうかが読めたのだ。そこで、ひとりになるや、リストを破いて捨ててしまった。

さて、クリスは、おもちゃ売り場のサンタクロース用の椅子に、ずっと昔から座っていたかのように、⑨、にこやかにおさまった。すぐに、目を輝かせた子どもたちの長い列ができた。子どもを連れて来た親たちの間から「今年の

サンタは本物そっくり！」とささやきあう声が聞こえてきた。

万事上々！ ちよつと離れた場所からこの光景を眺めつつ、シエルハマー氏は相好をくずした。

クリスのサンタクロースが、膝によじのぼってきた男の子にきいた。

「クリスマスには、なにがほしいかね？」

「消防車。ホースがついてて、お水がかけられるやつ。うちのなかでお水出さないからって、約束したの。お庭でやるつて」

その子の後ろに立った母親が、クリスに向かって手を振ったり、顔をしかめたりして、へあきらめさせて！の合図を送っているのだが、クリスは気にもとめない。

「よし、よし。いい子にしていれば、きつともらえるよ」

男の子は、大喜びでクリスの膝から下りた。承知できないのは母親だ。子どもを先に行かせると、低い声でクリスをなじった。

「まったく、どうして？ そんな消防車、どこにも置いてないですよ。あっちこっち、探したんですから」

「そんなことはない。西二十六丁目の二百四十六番地にあるアクメ玩具商会へ行ってみなさい。八ドル五十セントで売っているから。お買い得ですよ」

母親は、クリスの顔をまじまじと見た。

「正気なの？ メイシー百貨店のサンタさんが、よその店を教えるなんて！」

「べつに、変じゃないでしょう。お子さんが喜んでくれたら、それでよろしい。メイシー百貨店が売っても、アクメが売っても、いっこうにかまいませんよ」

こういう調子で、クリスマスは、子どもひとりひとりとおしゃべりを続けた。頭にあるのは「どの子も、クリスマスにはほしいものがもらえるといい」ということだけ。子どもの望みのおもちやが高すぎたり、メイシー百貨店で売っていないものだったりすると、どこへ行けば安いのが買えるか、つきそいの親にそつと教えた。親たちは、驚くやら、喜ぶやら。しかし、ひとりの母親に「坊やのほしがるスケート靴なら、ギンベル百貨店にありますよ」と教えているのをシェルハマー氏に聞かれてしまったのは、まずかった。

シェルハマー氏は、頭がくらつとした。こともあるうに、ライバルのギンベル百貨店をすすめるとは！ そうだ、ミセス・ウォーカーに知らせよう！ 社長の耳に入りでもしたら……！ うむ、今すぐ解雇だ！

ところが、部長室へと急ぐシェルハマー氏を、何人もの母親が呼びとめ、口々にこんなことを言った。

「なんとお礼を言ったらいいか！」

「こちらのサンタさん、子をもつ親の味方だったんですね！」

「これこそ、本物のクリスマス精神つてものですわ！」

「感激しました。これからは、なんでも、メイシーさんで買いますから」

①シェルハマー氏はわけがわからなくなり、とりあえず自分のオフィスに逃げこんだ。すると、デスクには、お礼のメッセージがどっさり届いていた。心を落ち着けようと、彼は椅子にどっかり腰をおろした。ひょつとすると、早とちりだったかな……！

秘書が、メッセーシの書かれたメモをまたごっそり持ってきて、こう言った。

「この企画、冴えてるじゃありません？」

「そう思うかね！ あのご婦人がたは気に入ってくれたらしい。しかし、社長はどうだろう？」

シェルハマー氏は、泣きそうな顔で天井を見あげた。しかし、天井に答えは書かれていなかった。

(ヴァレンティン・デイヴィス著 片岡しのぶ訳 『34丁目の奇跡』)

* やつ子さん……「あいつ」を親しんで言う語

* 清教徒……十六世紀、英国教会に対抗した新教徒の一派

* 相好をくずした……喜んでにこにこした

* オフィス……事務所

問一

①「ジムと 크리스が仲がいいのは、そんなわけからだった」とありますが、ジムは 크리스のどのようなところに感心して仲がよくなったのですか。適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何かがあればいつでも動物園にやってきて手伝ってくれるところ。

イ いつもそばにいて弟のように接してくれるところ。

ウ 何があってもたえず前向きに行動をするところ。

エ 警戒心の強い動物であつても心をゆるしてしまうところ。

問二

② に入る作品名として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ピノキオ イ 白雪姫 ウ シンデレラ エ 赤ずきん

